

## 2001年度第一回目『雪とドレッドと12才』

新年明けてから一発目のI.D.向上委員会ですが、もう「あけまして」の時期でもなくなってしまいましたね。  
とりあえず、今年も私のことよろしく願います。



さて、この冬は東京にも雪が何度か降り、つい先日などはかなりの大雪となりました。  
靴も好きな履いて外に出られないし、電車が止まったりして不便だし、今の私にはただやかかないだけの存在になってしまった雪だけど、子供の頃は積もるとすぐはしゃいだものです。

昔、小学校に通う通学路の途中に、小さな美容室がありました。  
その美容室ができたのは私が小学校3年くらいだったとき。  
当時のうちの近所にしては珍しくスタイリッシュな感じのお店で、本当に小さなお店だったけど開店以来いつも混んでいるという人気でした。  
学校でもこの美容室で髪を切っていた女の子は大勢いたけど、そこに通いたくなるのには理由があったのです。かっこよくて優しくて、私たち子供にも対等な感じで向き合ってくれる、美容師のお兄さんがいたから。  
お店にいる美容師さんはふたりだけ。もうひとりはお姉さんで、時々手作りのかわいいビーズの指輪をくれたりしました。  
私はふたりのことがとても好きでした。

小学校6年生の夏祭り、私と仲の良かった女の子たち4人は一緒に浴衣を着て行くことにしました。

ともだちのおばあさんに着付けをしてもらった後、私たちはお小遣いを持ってその美容室にいきました。浴衣に合うように髪をアップにってもらって、それから可愛い花の飾りをつけてもらうためです。ちょうどお店が空いていた時間で貸きり状態の中ひとりずつ髪をセットしてもらっているとき、私はお兄さんに「高校生になったらここでバイトしたい」と熱心に話していました。掃除とか、受付とか、何でもやるからって本気をお願いしたら、「じゃあ18才になったらね」とお兄さんは言いました。



「えー、そんなに先まで待たなきゃダメなの？」と言うと、「マアやちゃんが18才になる頃にはきっともっと大事な夢があって、そのことに夢中でこんな店のバイトしたいなんて思わなくなってるよ。だけどもし18才になってもこの店の手伝いがしたいくらい美容業に興味があったら、雇ってあげる」と言ったのです。それでも「絶対に絶対に18才になってもここで働きたい気持ちは変わらないの」としつこく言い続けている私に、「じゃあ予約ね」と言って紙を持ってきました。

そこに「18才になったらここでバイトします」という文章とともに私のサインを、そしてその横に「雇ってあげます」という美容師さんのサインを書き記し、お店に保管してもらうことにしたのでした。

結局、それを見ていたほかの友達が「私も！」とみんなその「予約」をしたので、紙には4人の名前が残ることになりました。

ちなみにこの夏祭りの夜、門限を過ぎて帰ってきた私はしばらく厳しいお説教をあびることになったのですが、今思えばあの時期が一番ませて、一番子供っぽかったのかなと思います。



その年の冬、雪が降った日、学校の帰りにお店

の前を通りかかると、お兄さんが表で子供達と雪合戦をしていました。私もその中にまじって一緒に雪を投げて遊びました。

そんなことがあった数日後、お兄さんがお店を辞めたことを知りました。独立して自分のお店を持ったらしいのです。代わりに別の女性の美容師さんが働いていました。本当に突然で驚いたけど、その時は少し怒るような気持ちもありました。教えてくれてもいいのに、何も言わないでいきなりいなくなるなんて。

春になって中学に上がると、美容室の前を通る機会もだんだんなくなりました。

でも時々髪を切りにいくとお姉さんが、「あの契約書まだ大事にとってあるわよ」とよく言っていました。

高校生のとき引っ越して別の町に住むことになったのがきっかけで、以来その美容室に行ったことはありません。12才の私はお兄さんのいるお店でバイトすることを信じて、気が変わるはずなんてないと思っていました。

そして約束の18才、私は2ndアルバム「DIVE」を作っていました。

お兄さんの言った通り、夢中なものが私を独占していたのです。

私にとって、ドレッドにヒゲのお兄さんが雪合戦をして子供みたいにはしゃいでる姿がすごく印象的で、雪が降ると思い出すのです。そんなわけでした。



\* maaya \*

(photo by maaya.)

... THE ID